日本基督教団
東中国教区ニュース
NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒七〇一-〇〇五五
倉敷市鶴形一-五-五
倉敷キリスト会館内
TEL(〇八六)四二一-二七八〇

巻頭メッセージ
「罪(つみ)き家族」

湖山教会　森嶋　道

クリスマスは「家族」を考える時です。一昔前、『ホームレス中学生』と言う本が流行しましたが、その背景には、現代の感覚が隠されているように思います。ある日、突然、家族が解散宣言されてバラバラに生きることになるといった感覚は、実際のところ、日本の家庭において感じられている家族観のズレではないかと思うからです。

一〇月にありました教区の集いで講師をされた奥田知志先生が紹介された、「ハウスレス」と「ホームレス」という二重の課題を日本は背負っているのでしょう。家(ハウス)に代表される物質的な不足を意味する「ハウスレス」だけでなく、安心できる場所としての家庭がない「ホームレス」は見えないだけに、深刻です。

「家族とはこうあるべきだ」という考え方は、時代や経済によって変化します。しかし、残念なことに私たちは、自分の両親の世代やメディアで作り上げられた家族観を引きずることで、新しい出会いの中で新しい家族観を見出せずに、それぞれの言い分が衝突します。だからこそ、愛は忍耐という言葉に集約されるのでしょう。

それぞれが持つ家族観はパズルのようなものです。既にイメージがあって、一人一人が決められた形(役目)を果たすのです。でも、それが合わなければ完成できません。

私は家族をはじめとする人の集まりはパズルではなく、積木のようなものだと思っています。それぞれの形は違いますし、決まった並び方はないのです。なぜなら、罪深い私たちはとがった部分を持ち、神の思いを外れ、人の期待にそえないからです。それでも、そのいびつな自分の罪の姿を認め合う時に、積木のように新しい組み合わせ方で、思いもしない家族になれると信じています。

教会は「神の家族」であると言われます。父なる神さまがおられ、礼拝する兄弟姉妹が集います。その交わりが母の温もりのようであり、ありのままを受け入れる場であることを願っています。励ます時もあれば、身をゆだねたい時もあって、お互いに支え合うクリスマスでありますように。また、教会をつなぐ教区も、広い意味では「神の家族」です。教会の中で深く交わるとともに、教区においても広い交わりを豊かにして、遠くても、近くに感じるような「神の家族」に出会う奇跡を神さまにお祈りしています

目次

巻頭メッセージ「罪(つみ)き家族」森嶋　道……1
第二回総社教会再建青年ワークキャンプ報告……2～3
第8回教区の集い報告……3～4
第三九回日本基督教団総会報告……4
「教団の根幹が揺らぐか」……4～5
岡山県西部地区「平和集会」報告……5～6
教会紹介・旭東教会・倉敷教会……6～8
新任教師オリエンテーション報告……8
教区からのお知らせ……8

★セクシュアル・ハラスメント相談窓口
毎月第3水曜日　午前9時～午後9時
電話番号　090-1330-8730

第二回総社教会 再建青年ワークキャンプ報告

九月一四日（日）～一五日(月)、第2回目のワークキャンプが開催されました。今年もヨルダン会のメンバー総動員により、少し参加が少なかった青年層も大いに励まされました。一二教会四六名の参加。窓枠と外壁の塗装、風呂撤去、ワックス掛けなど、世代を越えて共に汗を流しながら、教会の交流を持つことができて、感謝でした。準備頂いたカレーライスを食した後には、中井大介先生の証し、宇野稔先生の「奉仕」についての教えを伺う時も与えられ、青年たちに豊かな示唆が与えられました。総社教会でのワークは今回で最後となりますが、次回もワークキャンプを継続したいと思っていますので、ぜひとも「うちの教会でやって！」と教育委員会にお声掛け下さい。以下は青年たちの感想文です。

阪西大樹（笠岡教会　14歳）

今年の青年キャンプもとても楽しかったです。

一日目は、総社教会で礼拝をして、サントピアに行きました。晩御飯がすごく豪華でした。そのあとカレーに入れる野菜の皮をむいて、おふろに入って、そのあとみんなでトランプをしました。ちょっと夜更かししました。二日目は、総社教会の改造作業をしました。ぼくはけんや先輩と平川さんといっしょに五右衛門ぶろの解体をしました。けんやさんが「大樹やってみるか？」とぼくにドリルをやらせてくれました。すごく楽しかったです。そのあと山内先輩とけんや先輩といっしょにペンキぬりをしました。ぼくは助手をしました。「このキャンプがすごく好きだ」とぼくは思いました。そして解散したあと、ぼくは二回目だけど、総社教会の青年キャンプ恒例のツタヤの喫茶店にみんなで行きました。ぼくはココアフロートを注文しました。仕事をしたあとはかくべつでした。またこのキャンプがあればいいなあと思いました。

家にかえったらもうぐったりとなってしまいました。手足はペンキでベトベトでしたが、シャワーに入って体を洗うとぜんぶとれました。またキャンプして仕事したいです。

長尾謙治（鳥取教会　20歳）

今回のワークキャンプも、とても良い経験になりました。三年連続で参加でき、嬉しかったです。みんなで何かをするのはチームプレーが必要だし、何にでも協力することは好きなので、今回も作業を通してみんなに喜んでもらえてとてもよかったと思います。

作業も段取りが準備されていたので、効率良く、また、みんながまとまってできていたと思うし、中学生の大樹君とも仲良くなれました。自分が経験したこともいかせるような作業もありとてもよかったです。ワークキャンプを通して、自分自身も成長できるように感じますし、これからも、協力が必要な教会や、困っている方々がいたら進んでボランティアをしたいと思っています。

自分の仕事の中でもこれからも色々学び、それを活かしていろんな教会に行き手伝い、支えていけたらなと思います。壮年のヨルダン会の方々を見ながら、おじさんたちに負けないようにどんどん技術をつけて頑張るつもりです。壁の塗装にしても、釜風呂の解体にしても、分かる部分で協力したり、教えたりすることもできました。最後に、みなさんに「ありがとう」といわれてとてもよかったです。人に感謝される

のはとても気持ちがよく、それがあるから次も頑張ろうと思いました。

松田隆平（鳥取教会　19歳）

初めて訪れた総社教会を前にすると、この教会がどれほど長い間この場所に立っており、そして、多くの方がこの教会の再建のために奉仕をされてきたかということを実感した。自分は、外壁の塗装の奉仕を行ったが、自分も会堂再建のための奉仕の一部に携わることができ、やりがいがありうれしかった。また、初めて出会うメンバーとも一緒に奉仕をすることで交わりを深めることができてよかった。

今までは自分の所属する教会、近くにある教会のことしか知る機会もなく、また、他の教会のために奉仕をすることはなかったが、今回のワークキャンプを通して、小さな奉仕であっても、様々な教会の方たちと共にコツコツと積み重ねることで、形あるものへとなっていくのだということが実感できた。今後は、自分所属する教会だけでなく、他の教会のへも自分のできる奉仕を行っていきたいと思った。

山内悠平（湖山教会　19歳）

8月終わりに大学の関係で、宮城県にボランティアに行ったこともあり、スケジュールが忙しい中で参加することになりました。参加当日の日曜日も、朝にバイトがありました。体は疲れていましたが、以前の時にボランティアで仲良くなった友人も参加していましたので、思い切って参加しました。

総社教会は、とても古く、老朽化しており、色々な部分が痛んでいました。その教会を、人間の手でキレイにすることは、とても、いいことだと思いました。外壁をペンキで白く塗り直したり、新しいトイレを作るために、五右衛門風呂を撤去したり、色々な作業をしました。その結果、これまでよりも見違えるほど明るい教会になりました。色々な人たちが協力して、少しずつ良くなっていく変化を見るのは楽しいと思いました。これからも、修復を繰り返しながら、総社教会が元気になっていくことを願っています。

「第8回教区の集い」『他者のための教会』報告

一〇月一二日（日）、一三日（休）と、サントピア岡山・総社において「第八回教区の集い」が持たれました。部分参加の方もありましたが二一教会一〇二名の方々がお集まり下さいました。大型台風がまさに頭の上を吹き荒れるという三日前の予報下で、開催できるか中止するべきかと、実行委員は一斉メールで意見を交わしながら、二日目のプログラムを短縮にしてでも開こうと決めてのことでした。

講師は東八幡キリスト教会、ＮＰＯ法人抱樸理事長の奥田知志牧師でした。まず大塚忍牧師による開会礼拝から一日目のプログラムが始まり、小松茂夫教区議長の挨拶、そして「助けてと言える社会に―今日の困窮者支援の現場から」と題して奥田牧師の講演（Ⅰ）をお聞きしました。夕食と交わりの後はお楽しみのバザーを開き、教会建築などのために捧げようと教会員手作りの品が並びました。

二日目は、朝の礼拝から奥田牧師にお願いし、続いて講演（Ⅱ）を「神の国とは―他者性の回復としての福音」と題してお聞きしました。「こき使い過ぎかも」と言いながら、せっかくだからと三回も話して頂きました。その後、急いで記念写真の撮影をして、午後の分団や全体会を取りやめて解散いたしました。本や会場の整理などを終えて講師を岡山駅までお送りする頃にはかなり激しい雨風でしたが、無事に開く事ができて、本当に感謝でした。

大塚牧師の開会礼拝は、今年度のテーマにふさわしく、まさに講演の導入であったと感じました。「西東京教区の永山教会にいた時、クリスマスが近づいたある日、電車を待っている時にすさまじい警笛、そしてブレーキの音。鈍い音がドスッと。ホームに駅員、救急車の音。いのちを絶とうとしたのは駅に近い女性で、線路にしゃがみ込んだと。その日は、その音が繰り返し頭によみがえりました。私は主日礼拝で「この方が誰かと繋がっていれば死なずに済んだのではないか。近くの教会が共に生きることをもう一度考えねばと説教し、命に向

かい合うことを問いました。すぐに教会員が『全国自死遺族の会』の存在を伝えてくれて、……月一回の会が継続しています。……教会は戸を開いて待っているのではなく、内にこもる人、無関心な人の所へ出てゆきましょう。喜びを内に留めていることはできないはずです。イエスが『あなた方が彼らに食べ物を与えなさい』とおっしゃったのですから。」といった内容だったと思います。

奥田牧師の講演は、大文字で五六ページにも及ぶ冊子を頂きましたので、紐解けば、それだけでおっしゃったことが思い出されますが、印象的な言葉をお伝えしたいと思います。「『議論の前に』では、特定秘密保護法案が通れば法案の五章からして、知る権利の剥奪と同時に、言う権利の剥奪が起こるでしょう。また、『二つの診立ての重要性』では、①住居がない②食べる物がない③着る物がない④病院に行けない。というのはハウスレス（経済的困窮）であり、①家族がいない②心配してくれる人がいない③心配する相手がいない④覚えてくれる人がいないというのがホームレス（関係性の困窮・孤立）です。つまり、ハウスレスの人が畳の上で死にたいと言われ、手続きをして畳の上に上がった。訪問してみるとこぎれいにしている。味噌汁くらい作っている様子。ところが独りでぽつんとしている。オレの最後は誰が見てくれるのかと。自立が孤立に終わるようならば、その支援は不十分です。教会は心の問題だけでなくホームに取り組まねばと思います。教会が本気でホームになることを考えねばならない。また『地域のホームレス化』では、ある襲撃事件を捉え、中学生が夜な夜なホームレスの人たちに石を投げに来る。その内、ビンやレンガを投げられて、おちおち眠れない。学校へ止めてもらうように話に行ったが、その帰りに、ホームレスの叔父さんがしみじみと『俺はホームレスだから分かる。あの子ら、家があっても帰るところがない。親が居ても、誰からも心配されていない。』と。教会が提供するのはハウスとホームではないでしょうか。」大変、大切な集いでした。（光明園家族教会　難波幸矢）

第三九回日本基督教団総会報告

十月二八日(火)～三〇日(木)、東京のホテルメトロポリタン池袋において、第三九回日本基督教団総会が「伝道する教団の建設―信仰一致に基づく伝道の推進―」を主題に開催されました。開会時四〇〇名中、三七四名出席により成立しました。ただし、沖縄教区は、「合同のとらえなおし」問題が解決されていないため、教団と距離を置くとの決議がなされており、教団総会議員を選出しておらず、欠席でありました。

議長選挙は、石橋秀雄師の再選、副議長選挙は、佐々木美知夫師の二回目の選出、書記には、雲然俊美師が再選されました。常議員選挙では、東中国から信徒常議員に河田直子議員が、二回目の選出となりました。

今回、特に重要な議案は、「教区活動連帯金を廃止する件」と「伝道資金規則制定に関する件」でした。議員提案でも、両案に対する審議に関する件や教区活動連帯金を推進する件が提案されていましたが、少数否決された後に、「教区活動連帯金を廃止する件」と「伝道資金規則制定に関する件」が上程されました。「教区活動連帯金を廃止する件」では、17教会中12教区が、教区活動連帯金は必要だと回答しているのに、なぜ廃止する必要があるのかという質問が出されていました。「声があっても廃止しないといけないこともある」との答えが執行部より出された。反対意見では「連帯金が廃止されると多くの教会が廃止に追い込まれてしまう」等、小規模教会・小規模教会を多く含む教区にとって連帯金は恵みであるので存続すべきというような意見が出されていました。無記名投票によって、採決がなされ三六六名中一九七名の賛成で、可決しました。

これからの東中国教区として各教会として、厳しい中でどのように福音伝道を行っていくのか、多くの課題を示された結果となった決議だと感じております。

（報告　田中寿明教職議員）

「教団の根幹が揺らぐか」

冒頭、開会礼拝で「今日、個人も教会も総じて衰えが見えるが、いま最も大切な

ことは『主に望みをおく人は、新たな力を得る』（イザヤ・四〇・三一）のみことばを信じ、宣教に励むこと」の説教に、教団は新たな歴史を開くかと、望みと力を与えられた。

しかし、教団議長選挙で現任の石橋秀雄師二〇三票、奥羽教区議長の邑原宗男師一四二票の票数が、五二もの議案のほぼすべての採決に連動し、執行部案がことごとく承認された。内容の是否ではなく、教区ごとに拘束された壁で、一強多弱の国会以上の独善的な議事運営はいかがなものか。

早朝礼拝で「愛するとは、相手のために自分が変わること」と示されたが、異なる意見をすべて排除する組織が、今後、どうなっていくのか。一信徒として虚しく、「これでいいのですか」と、主に問いつづけた三日間であった。

各種の報告で、東日本大震災救援募金（～今年三月現在）は、国内八・九億円、海外三・七億円（東中国教区、七二件、三七三万円）の協力があり、被災教区から感謝と現状報告が述べられた。まだ課題が山積しているので、引き続いての支援が必要と痛感した。

この度の最も大きな議案「教区活動連帯金の廃止」と「伝道資金規則の制定」については、賛否両論が激しく対立した。

わたくしは発言の指名を得て、「九月の全国財務委員長会議で、三分の二の教区が伝道資金規則の制定に反対し、多くの問題点を指摘した。その案を再検討・修正することもなく提案・強行することは、今後、教団の運営の根幹にかかわる」と危惧し、強く反対したが、既定通り可決された。事後、多くの兄姉から賛意と激励をいただいたが、成就感のない疲労がしばらく残った。今後、教団はどう流転するのか。主の導きを祈り、総員の信仰による良識の発揮を心から願う。（報告　信徒議員　松田章義）

岡山県西部地区「平和集会」報告

去る一〇月一九日（日）の午後に玉島教会を会場にして、今年度の岡山県西部地区の「人権・平和集会」がもたれました（参加五教会、計二三名）。この集会は、一昨年までは「人権」と「平和」を主題にした別個のプログラムとして催されていたものが、昨年度から年一回の集会に統合されて、その年度に強い関心がもたれたり、エポックとなっているテーマを取り上げて、企画されることになったものです。そのようになった理由としては、そもそも「人権」と「平和」の問題は、分離して考えられるものではなく、ともに深く結びついた課題であるといった問題意識によるものでした。

そこで今年度の集会のテーマは、現在、安倍内閣によって進められている特定秘密保護法の動向や、集団的自衛権の行使を容認するために憲法解釈の変更が閣議決定されたことなどに対して、これから日本の教会の人たちが、どのように向き合ってゆけばよいのかを考えようということで、「平和憲法のゆくえー集団的自衛権・解釈改憲をめぐって」と定められて、「岡山県9条の会」事務局の石井淳平さんを講師にお招きしました。また会場では、「原爆と戦争展を成功させる岡山の会」の中井淳さんの協力で、「第二次世界大戦の真実」の写真パネルの展示も行なわれました。

石井さんは、長年、教員生活をしていた経験から、学校教育の現場における能力主義の弊害や、中曽根内閣から始まった日本政府による有事法制政策、さらには、一九七一年に日米政府の間で結ばれた沖縄返還協定における「密約」の問題などについても触れて、昨今に国会で成立した「秘密保護法」の内容が、一九四一年の「国防保安法」に通じるものであることを指摘されました。また石井さんは、安倍首相が掲げている「積極的平和主義」の考え方には、この日本の社会が、いつでも「戦争できる国」へと変えられてゆく危険性があることを、資料に基づいて分かりやすく説明してくださいました。

石井さんは、休憩後にもたれた質疑応答の時間も、参加者からの質問や意見に対して懇切に応えてくださいました。ある若い

世代の男性は、最近、日本の国内で起こっている「ヘイトスピーチ」の問題や、『朝日新聞』のいわゆる「従軍慰安婦」問題の報道のあり方や、尖閣諸島と竹島の領有権の問題、現在の「イスラム国家」の動向などについて質問し、また、若い世代の女性たちは、一人の母親として、これから自分の子どもにどのように「戦争と平和」の問題について伝えていったらよいのかといった悩みを相談し、さらに高齢の世代の人たちは、自分の戦争体験について語り、ある教会からは、この問題についての学習を継続して行なってきたことの報告がなされたりと、―参加した人たちが、世代を超えて、この国の「平和のゆくえ」について真剣に考えようとしている様子が伝わってきた集会だったように思います。

戦争体験のない私たちが戦争について知る方法は、過去の歴史を学ぶことから始まります。その意味で、今回の集会はとても有意義な機会であったと思います。それと同時に、現在、かつての戦争の時代と同じような流れで、政府の都合のよい法案が、熟慮されることなく可決されていって、戦争への道をひらくための根回しが、着々となされているように、私には思えてなりませんでした。声をあげるべき時にあげなければ、気がついた時には「時、既に遅し」になってしまうかもしれません。イエスさまの「平和を実現する人々は幸いである」との言葉が重く感じられたひとときでした。

（報告　玉島教会　遠藤ゆり子）

教会紹介

旭東教会

私たちの旭東教会は、創立して一一二年目の歩みを続けています。

「旭東教会は一九〇三年一月三一日に創立され、当時の『日本組合基督教会』につらなる一歩を踏み出しました。しかし、それ以前から、伝道によって、聖書の神への信仰を持った人々の群れが西大寺の町にはありました。また、その直後、『愛児園』という保育所が設立されましたが、この設立にあたっては、旭東教会の婦人達が中心になり働きました」と『一〇〇年史』には記されています。

一九二三年には当時の信徒たちの祈りと労力により、現在の会堂が建てられました。一昨年一一〇周年記念事業の一環として全面補修を行い、同時に集会室には「最後の晩餐」のステンドグラスがはめこまれました。ＪＲ赤穂線の西大寺駅から歩いて一〇分、赤い屋根の教会です。

指方信平牧師・愛子牧師を中心に「神を愛し、隣人を自分のように愛する教会」の標語を掲げて励んでいます。主の日の礼拝の充実と子ども達への宣教を目指しています。

礼拝においては豊かな説教が語られ、讃美の声は会堂に響いています。

子ども達に対しては、毎週の主日礼拝のほかに、毎月第一土曜は〈サタデー・ジュニアサークル〉を行なっています。時間を十分に取ってプログラムを行うことができるので、楽しみに集まってくれている親子で集会室いっぱいになります。

礼拝後には工作、綿菓子、ピザ作り、楽器作り、ミニ運動会、イースター、クリスマスなどなど…。年に4回はファミリー礼拝を行ない　教会員との交流も行なっています。いつかこの「種まき」の業が実りますようにと祈っています。

祈祷会は、それぞれのライフスタイルに合わせて参加しやすいように、毎週木曜日に2回、開かれています。同じテキストが読まれて、その解説、祈りの時を持っています。牧師曰く「気兼ねなく話しができる午前の部、

しっかり祈り合う夜の部」だそうですが、どちらも交わりには大切だと思います。ひとりひとりの祈りが輪になって、教会の祈りになると実感しています。また毎年受難週には早朝祈祷会が毎日行われています。

交わりも大切にしています。礼拝後には「ほっとタイム」があります。集会室でコーヒー、紅茶を飲みながら自由に語り合い、「ほっ」としています。グループ活動では、ハンナの会(女性のグループ)は、食事の段取りの話し合いや当日の説教を聞いての分かち合いをしています。壮年会は「信徒の友」を通しての学びをしています。二人の牧師先生がそれぞれに参加してくださいます。創立記念の伝統の「かけ汁」をはじめ、イースター、恵老の日、クリスマスの楽しい愛餐会には心のこもったおいしいご馳走が用意をされます。また、バザーの代わりに「カレーを食べる会」を年に二回、行っています。

他教会との交わりも大切にして、教区の交換講壇に参加しています。説教はもちろんですが、他の教会の様子もわかり、参考になります。壮年会主催の教会訪問も行なわれています。昨年は総社教会、今年は和気教会を訪問させていただきました。

旭東教会のシンボルカラーは「緑」でしょうか。会報のタイトルは「緑の牧場」、映画会は「グリーン・シネマ」。教会員の平均年齢六十七歳。まだまだ枯れない緑です。教区にあっては中規模の教会ですが、社会にもしっかりと目を向けて、平和を望み内なる充実も目指して歩みたいと願っています。

（報告　脇本　光代）

教会紹介
倉敷教会

教区の皆様から「新生・倉敷教会」と言って頂けるように、日々歩みを続けております。今年度より中井大介牧師、有岡史季伝道師ともに新しく着任し、新鮮な空気を感じつつ、教会が動き始めました。

倉敷教会は一九〇六年に設立されました。しかし、設立当時は、今の礼拝堂はなく、仮の会堂を美観地区にある現在の亀遊亭に据え、献堂を祈る日々が過ぎました。そんな教会員の祈願が天へと届き、叶えられたのは一九二二年のこと。西村伊作の設計により、鶴形の地に石造りの礼拝堂が献ぜられ、現在に至ります。

二〇〇九年、国の登録文化財となり、ますます存在価値を深めている現在の礼拝堂は、しかし、耐震問題や老朽化という深刻な課題を抱えています。信仰の先達が残したこの遺産を、我々がどのように受け継いでいくべきか。倉敷教会の皆で考え、知恵を集めているところです。

倉敷教会の一週間は、主の日に始まり、CSの礼拝と主日礼拝を守ります。火曜から土曜までは教会の喫茶店「シャロン」の営業日であり、教会員だけでなく、地域の方々にも開かれた憩いの空間として運営しています。水曜は聖書研究祈祷会が持たれ、旧約と新約の学びを続けています。木曜と金曜は各種委員会や集会の開催日として、ほぼ埋まっており、人の出入りが絶えない活発な一週間を過ごしています。

また、ネーミングセンスに定評のある「比較的若い人の集い」も、非定例の集会ではありますが、多くの友が集う交流会です。聖書を読み、主のみ言葉を味わいつつ、そして、季節に合わせた楽しい食卓を共に囲む交わりの時。今夏に開催した折は、生憎の大雨に見舞われましたが、屈せずにバーベキューを敢行し、狭い軒下でぎゅうぎゅう詰めになりながらも、記憶に残る会となりました。次回開催は今年最後の主日。年忘れと新年への望みを胸に、聖書と鍋を囲む予定です。

教会と並んで倉敷で長い歴史を紡ぐ竹中幼稚園では、平日いつも子供たちの声が響きます。季節の移り変わりに沿った独創性のある保育カリキュラムには定評があり、子ども達の笑顔もそれを証明しています。また、教会の暦に合わせて幼稚園でも復活日、聖霊降臨日、降誕日等々、キリスト教に基づく大切な集会行事を守り、皆で祈りを合わせます。いつでも主が共におられる

ことを子供たちが知るようにと願い、教会と幼稚園は支え合う関係を続けています。

中部地区、そして東中国教区への関わりを深めながら、主の体である教会の業をなしていきたいと願っています。次の百年の宣教ビジョンを描きつつ、日毎の礼拝を大切にする歩みをこれからも進めて参ります。

（報告　有岡史季）

新任教師オリエンテーション報告

去る九月八日、邑久光明園家族教会にて、今年度より東中国教区に初めて赴任した教師を対象に、新任教師オリエンテーションが開催されました。児島教会の笹井健匡牧師、倉敷教会の中井大介牧師、有岡史季伝道師が新任教師として参加しました。最初に、教区三役から東中国教区の組織や運営の仕組みについて説明をしていただき、また一九九五年の第四四回定期教区総会において可決された「東中国教区宣教基本方策」を中心に教区の宣教課題等について案内をいただきました。東中国教区は、小さな教区であり、その小規模ゆえにさまざまな課題を抱えていることを知りました。各教会が近隣諸教会を慮り、助け合い寄り添いながら、宣教の業を為していくことの必要を感じました。

その後、光明園家族教会の教会員であり、教区常置委員としてもお働きくださっている難波幸矢さんの案内のもとで、邑久光明園と長島愛生園を巡りました。まだハンセン病への差別と迫害が行われた頃の名残りが、随所に刻まれていました。案内は光明園内にある「御歌碑」から始まり、島の高台に位置している「光明神社」、ひと山越えて辿り着く「監禁室」、かつては火葬場であり、今は人体標本とされた胎児らの慰霊碑が立っている「しのびづか公園」、湾を挟んで左右に分かれる「職員桟橋」と「患者桟橋」、急こう配の資材搬入路であった「トロッコ線」と、それに続く「藪池桟橋」など。散策マップには載っていない詳細な説明と、包み隠すことのない真実の歴史を、難波幸矢さんから教えていただきました。

新任教師オリエンテーションが、この邑久光明園家族教会で行われたことを心に留めつつ、この教区に属する一人の教師としてハンセン病や、それにまつわる歴史と出来事に関心を寄せながら、牧会の現場に臨みたいと思います。

（報告　倉敷教会伝道師　有岡史季）

教区からのお知らせ

○第5回（臨時）常置委員会

一月十二日（月）十時三〇分より

岡山信愛教会にて

主な内容は、先の教区総会の議事録案の精査と審議未了の廃案となった中期宣教計画をさらに実施するための方策について。

（都合により、第六回（臨時）常置委員会となるかもしれません。）

○第二回宣教会議

二月二日（月）十時三〇分より

鳥取教会にて

主な内容は中期宣教計画をさらに実施するための方策と二〇一五年度の予算について。

○第六回常置委員会

二月三日（火）九時三〇分より

鳥取教会にて

主な内容は、先の教区総会の反省と中期宣教計画をさらに実施するための方策について。（都合により、第7回常置委員会となるかもしれません。）

※去る十月の教団総会において可決された「教区活動連帯金」の廃止と「伝道資金」の導入による、次年度の教区予算の変動について審議するために、十二月に第五回（臨時）常置委員会を開催するかもしれません。日時や場所については未定です。

（教区書記　八谷俊久）。

編集後記

総社教会ワークキャンプ、教区の集い、教団総会等々。人が集えば喧々諤々も止む無しですが、まずは、集うことが赦された共同体であることを、心に留めたい。そう感じるイベントが多く開催された秋でした。

（A・F）